りびんぐらいぶず　令和三年十月第一号

頼りなさい」という助言をご縁に

◆ご讃題

「其佛本願力」といふは、弥陀の本願力と申すなり。「聞名欲往生」といふは、「聞」といふは如来のちかひの御なを信ずと申すなり。「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり。「皆悉到彼国」といふは、御ちかひのみなを信じて生まれんとおもう人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり。

（Ref 尊号真像銘文』本註釈版 p645）

◆お聴聞が身に沁みる 宗報八月号巻頭言から）

病死した子を前に、これから葬儀などをするのだろうかと、ただ立ち竦（すく）んで何も考えられずにいた若い母親である私に、時間をかけて、これから頼るべきところを見定めるように導いてくれたのは、結果的に、そのときに関わってくれた葬儀屋さんであったと思う。

当時、無宗教の音楽葬とするアイデアも示されたが、不確かながら夫の長野県の実家と私の福岡県の実家が浄土真宗のお寺に御世話になっていたことを伝え、お西さんの僧侶になった同世代の友人がいるが、彼に葬儀をして貰うことは可能かと相談すると、葬儀屋さんはきっぱりと、「そんな人がいるのなら、ぜひ頼りなさい」と言ってくれたのだった。

葬儀から三十年近くたった今思えることは、それまで、ものごとをまず、ひとに頼ることから始めるということを教えてもらったことはなかったのではないか、ということだ。仏事の作法をはじめ、教わることばかりだった。法要参拝や、仏婦の行事参加など、幾多のお誘いを受け続けた。参加できないことも多く、**なぜお聴聞が大事なんだろう**とある坊守さんに問うと、「そうねえ、わからないからお聴聞するのよねえ、わかったようでもすぐ忘れるしねえ」と話してくれた。

そのうち、ひとに頼らず迷惑をかけないで生きていると思っている自分の傲慢さを知らされ、お聴聞が身に沁（し）みるようになってきた。同じ言葉でも、さらに奥深い意味に気付かされることも、聞いても聞いても、気づきをいただく。今は、己（おのれ）に願いはなくとも願いをかけられた身だ、という言葉を噛（か）みしめている。

（「宗報」二〇二一年八月号巻頭言、浄土真宗本願寺派　仏教婦人会総連盟会長　佐原多賀子）

(後書き) 一文は、感動を覚えた「宗報」巻頭言である。めったにない出来事である。

「病死した我が子の葬儀をするのかの現実に直面して、夫と自らの実家が互いに日本の遠地にありながら、浄土真宗のお寺に御世話になっていた歴史的な繋がり、お西の僧侶になられた同年配の友人の存在を吐露したとき、「そんな人がいるならぜひ頼りなさい」ときっぱりと勧めてくれた葬儀屋さんの一言が筆者を導いた。人に頼った最初の出来事だった。

少なからぬお法りや行事のお誘いの後に**「なぜ、お聴聞が大事なんだろう」**とある坊守さんに問うと**「そうねえ、わからないからお聴**

聞するのよねえ」と応えられた。

一念多念文意第二条(註釈版聖典P678)の**本願成就文**の御自釈に「聞其名号」といふは、本願の名号を聞かせて戴くことであり、きくといふは、本願を聞きて疑うこころなきを「聞」といふなり」と仰せ下さってある。

聞いても聞いても肯かない傲慢な私こそがお救いのお目当てであったと頭を垂れ、終に本願の名号のお謂われをお聞かせに与る。聞くといふは、信心(＝無疑心)をあらはす御のりであるから、何時の日かその日がやってくるまでお聞かせに与り、頭が垂れるまでお聞かせに与るのである。**聞即信のお法り**である。

筆者は次のことばで一文を締め括る。

そのうち、ひとに頼らず迷惑をかけないで生きていると思っている**自分の傲慢さ**を知らされ、**お聴聞が身に沁みる**ようになってきた。同じ言葉でも、さらに奥深い意味に気付かされることも、聞いても聞いても、気づきをいただく。今は、己に願いはなくとも願いをかけられた身だ、という言葉を噛みしめている。

◆コロナがもたらす変化にどう応えるか

コロナを考えるときに、聖書やキリスト教の視点から非常に大事だと思わされたのは、**安息日**です。日本では、絶えず働いているという勤勉さが求められ、立ち止まるということをしません。しかし、それが結果的に過労死など、社会のいろいろな問題を引き起こしています。安息日には規定があって強制的に休みます。ユダヤ教の場合には、金曜の夕方から土曜の夕方にかけての一日、一切の労働を断ちます。自分達が一体何者なのかということを考え直す重要な時間です。強制的に時間を中断しなければ、何が大事かということも忘れてしまう。キリスト教はこの考え方を引き継いでいます。このことを議論するときに有名なニュートンの**「創造的休暇」**があります。十七世紀にペストが蔓延して、大学が休暇になりました。その休暇中、田舎に帰ったときに、ニュートンは、万有引力の法則をはじめとする科学史上非常に重要な着想を得たと言われています。我々はしっかりと立ち止まって、今までできなかったことをきちんと考え直す。或いは休むことの重要性を考え直す。こうしたことが、日本社会にとっては必要ではないかと思います。

（第九回　宗門教学会議開催報告、小原克博　同志社大学神学部教授）

(後書き) 八月二十一日の歓喜会は丁度コロナ第五波蔓延の最中になったので、総代さんが心配し中止を申し立てた。初めての申し立てであり、それ自体の尊さに、住職はこれを受け入れた。ところが続く九月の彼岸会も同様な申し出が立てられ、端からの否定も憚られご法座を中止し住職は心が傷んだ。仏教には安息日はないが、お聴聞して日常性を破られることが同じ効果をもたらす。ご法座を中止させる程に自分たちのお聴聞はできているか振り返って、続くお聴聞の会には必ず顔を見せて欲しいというのが住職の偽らざる気持ちであった。合掌。

◆正覚寺仏壮お聴聞の会十月三日(日)二十時より
◆正覚寺仏婦例会十月十七日(日)十九時半より
◆正覚寺報恩講十月三十日(土)大逮夜十四時、初夜(土)十九時半、三十一日(日)満日中十時より。
◆その成果を公開したHPは、正覚寺　北小松」で検索し、ヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田　玄宥